NPO法人棚田ネットワーク会報誌　第128号

棚田に吹く風

2023
夏
Summer
季　刊

2 特集
ありがとう!岩首談義所

5 フォトエッセイ
美しい棚田との出会い

6 棚田・里山からのたより
白檀の棚田
～地元有志とたくさんの応援団の力で蘇った里山の風景
静岡県浜松市引佐町西四村

8 コラム
棚ガール
生きもの屋の里山考

9 棚田博士は今日も行く
甲府盆地南縁にある棚田
山梨県富士川町眷米

12 読者のひろば

14 棚田俳壇
つ・ぶ・や・き

15 Project Report

特集

ありがとう！岩首談義所

棚田ネットワークが夏の恒例イベントとして開催していた佐渡棚田ボランティアツアー。中心拠点だった岩首集落の交流施設「岩首談義所」が、2023年3月31日をもって閉所となりました。懐かしい木造校舎での夏合宿は、私たちに子供に戻ったかのような楽しい思い出を残してくれました。岩首談義所の代表・大石惣一郎さんの特別寄稿と共に談義所の思い出を振り返ります。

岩首談義所（旧岩首小学校）との15年

元岩首談義所代表　大石　惣一郎

棚田ネットワークさんの夏旅で長年ご利用いただいてきた岩首談義所が、2007年の利用開始から15年の歴史に幕を引くことになりました。

岩首談義所は、128年の歴史があり私の母校でもある旧岩首小学校の木造校舎（現在の校舎は1945年に村の山を切って建設）をなんとか廃屋にしないための取り組みとして始めた交流拠点です。

談義所は、首都圏の大学を中心とした大学生の地域調査、生物多様性調査、環境調査、サークルの合宿を受け入れてきました。最初は獨協大学のトキ関係調査、そして東京工業大学・九州大学の「トキと社会研究チーム」の佐渡拠点として活用されました。東京工科大学トキチームと始めた荒廃竹林整備事業では、整備伐採した竹を使い「岩首竹灯りの集い」を開催しました。早稲田大学環境サークル「ロドリゲス」の受け入れは開所翌年から始まり、コロナが始まる前の2019年迄続いていました。横浜市立大学料理部の夏合宿の受け入れでは、最終日に集落民から頂いた夏野菜を使って開催する「夏の夕食会」が風物詩にもなっていました。大正大学地域創生学部は2016年の学部開設と同時に地域実習の受け入れを始め、参加者の一人が地域おこし協力隊として戻って来てくれるという嬉しい展開になりました。

6年前からは、CSR活動として新潟のアウトドアメーカー「スノーピーク」

写真提供：佐渡・ママクワンカ

が田植え・稲刈り体験の開催を始めてくれ、今年も開催しました。保育園、小中学校の作品と集落民の作品を集めた「岩首むら展」の開催も開所当初から続け、談義所の年間利用者は最高で延べ６００人を超えることも。岩首談義所が縁で佐渡に移住してくれた人も数多くいました。ある年には棚田学会の総会が開催され、たくさんの棚田関係者に佐渡の棚田、岩首昇竜棚田をご紹介しました。

そんなご縁もあり、２０１６年に第22回全国棚田（千枚田）サミットを、離島として初めて佐渡で開催するという、談義所開所時には考えても居なかった大きなイベントにも関わることができました。そうした岩首談義所を通した交流事業等が評価され、２０１９年に施行された棚田地域振興法では２０２１年に佐渡で初めての指定棚田に指定されました。

日本中で過酷な状況にある棚田地域の中で、今のところまだまだ元気な状況を保てているのは、皆さんとの交流から得た棚田環境・景観の価値、意義に集落民が気付いたからだと思いたいです。

しかし、経済優先度が強くなってきた現在、「訪問者が増え地域の環境に悪影響が出て来ている」「地域経済に貢献していない」等の声も大きくなってきました。そこに追い打ちをかけるように、２０２２年、集落と佐渡市が、村の将来が掛かっているともいえる岩首談義所木造校舎を"老朽危険建築物"と判断し使用禁止としました。地域と行政の判断に逆らい１年間は延長させてもらいましたが、これ以上の延期は私達の能力では無理と判断し、２０２３年３月31日を持ちまして閉所とさせていただきました。長年のご支援に深く感謝申し上げます！

昭和レトロな木造校舎を愛してくれた大学生、社会人に成っても再訪してくれるＯＧ・ＯＢ。談義所を彼らの「第二の実家」としたかった爺の夢は半ばで終わりましたが、皆さんからご教示いただきました「棚田愛」は忘れることなく、「百年後の子供達に棚田環境・景観を残す」活動は、新たな組織「一社・岩首めぶきラボ」を立ち上げ、木造古民家空家を拠点として継続していきます。コロナも落ち着いてきた今、是非「佐渡夏旅」を復活して下さい。日本の棚田よ永遠であれ!!

棚田ネットワークと岩首談義所

「棚田に吹く風」編集部

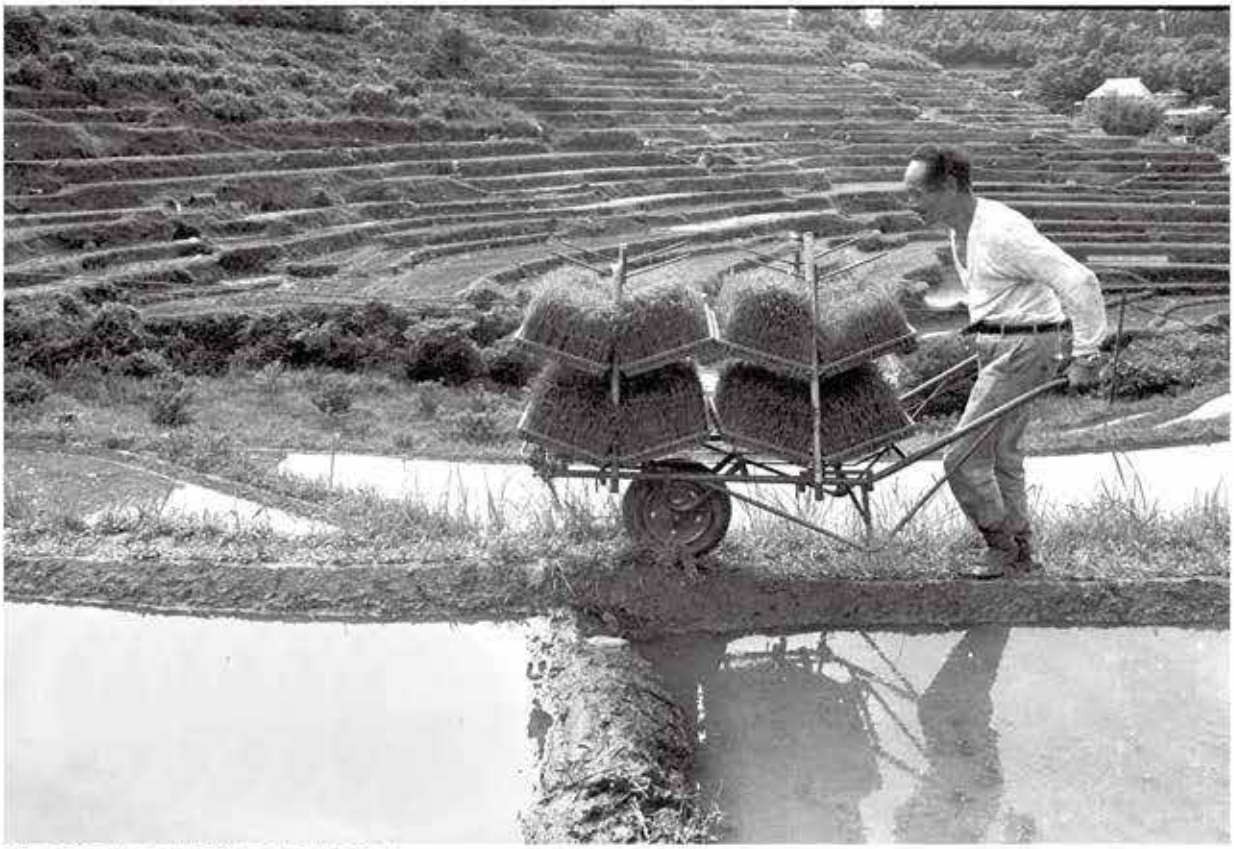
夏本番の「海の日」、ボランティアツアーの一行は、涼しい佐渡を目指し毎年海を渡っていました。このツアーは棚田ネットワークが主催する２００２年に始まった真夏のイベントです。トキ保護活動の一環としての餌場づくり作業がメインで13年間に亘り続きました。トキに魅せられ東京から佐渡に移住したＮＰＯスタッフの仲立ちで続けることが出来ました。

佐渡島南東部の山深い月布施の棚田がボランティア活動の舞台で、ここ前浜地区は絶滅した日本トキの最後の生息地の一つといわれています。地元農家さんの車に分乗して山を上り、棚田に着いたら作業の手ほどきを受けながらのビオトープ整備が主な作業です。荒れ果てた休耕田は大勢の参加者の手でビオトープへと姿を変えていきます。こうした地道な活動は多くの団体により佐渡の各地で行われ、その甲斐もあってか、最近のトキの生息数は５６０羽に達し、このうち約４００羽が野生で生まれた個体だそうでボランティア活動に参加した私達にとって嬉しいニュースとなっています。

この活動を側面から支えてくれたのが、棚田の仙人こと大石惣一郎さんが代表を務める体験交流施設「岩首談義所」です。昼は棚田で汗を流し、夜はここに宿泊。広い講堂では自炊の夕食会ばかりでなく、ときには学習会、車座の討論会、映写会や民芸披露など地元の農家さんを交えた多彩な交流会が開かれ、とても活気にあふれていました。

談義所の裏手には昇竜棚田の愛称で呼ばれる岩首棚田があり、朝はまだ薄暗いなかこの棚田のてっぺんに登り、佐渡海峡越しの日の出を堪能するのも楽しみの一つでした。佐渡での活動拠点としての岩首談義所の存在は、棚田ネットワークの活動を振り返るときに欠かすことができない記憶として残ることでしょう。

談義所が老朽化で姿を消すのは私たちにとっても寂しいことですが、代替えの施設で岩首棚田の活動が今後更に発展することを期待しています。



昭和の風景（1975年撮影／岡山県上山棚田）

フォトエッセイ

美しい棚田との出会い

写真・文
高田 昭雄

ここは岡山県美作市上山の棚田、つい50年前まで、この一帯は大小あわせて6000枚とも8000枚ともいわれる棚田が広がっていた。「上山の千枚田」と呼ばれ、この地方有数の米どころであり、谷筋に開かれた棚田は美しく見事であった。

しかし、1970年代に入って農政の大転換ともいわれる減反政策が取られるようになり、耕作をやめる田んぼが出てきた。また県南では工業化が進み、次第に若者の多くが都会に流れていき、後継者不足となった。

行政も一時はこの美しい棚田を残したいと補助金を出したが、これも一時的なものであり、荒れるにまかされた。

この写真は荒れる前の美しい棚田があった時代のものです。

高田 昭雄 たかた あきお

1939年 岡山県生まれ
1971年 三つの子どもの世界 四人展（銀座ニコンサロン）
1972年 カメラ雑誌「フォトアート」招待作家
2005年 個展「橋脚になった島」（新宿コニカミノルタプラザ）
2005年 写真集『橋脚になった島』
2014年 個展「よみがえれ千枚田」（新宿コニカミノルタプラザ）
2016年 写真集『水島の記録』（吉備人出版）
2021年 写真展「恵みの川・歴史の道一小田川」
故石津良介氏に師事、協同組合日本写真家ユニオン会員

白檮（しらかし）の棚田～地元有志とたくさんの応援団の力で蘇った里山の風景

静岡県浜松市引佐町西四村

1：白檮棚田の全景。遠くに浜松市街が見える／2：代かき・平とり作業／3：田植え／4：稲刈り

水が湧き出る傾斜した土地

浜松市北区引佐（いなさ）町田畑地区にある竜（りゅう）ヶ石山（しやま）（359・1m）の中腹（標高約200～250m）に白檮の棚田は広がっています。

白檮とは「しる（汁）＝湧き水、しろ＝山腹の平坦地、かし（方言でかしいでいる）＝傾いている」に由来する「水の湧き出る山腹のなだらかに傾斜した土地」を意味する小字名です。

ここはこの地区の最も高い所にある棚田です。棚田が荒れ放題で朽ちていくのはもったいない、復田して、耕作していた時期の風景を取り戻したい、自然との共生を実感できる場所、さらに住民による共助の証を体感できる場所でもある、という思いを地区の年次総会の場で住民に話し、賛同した地元有志で「里山元気もりもり隊」が2007年4月に発足し、棚田の復田作業が始まりました。

復田と最初の田植え

まず棚田跡がどの様な状態か確かめるために、鋸、鎌、チェーンソーや草刈り機などの道具を15人が持ち寄り、木の伐採や草刈りを始めました。作業が進むにつれ、思った以上の良好な状態の棚田跡や水路跡が現れました。復田できる確信が持てました。1か月半ほどで、大小10枚（約10a）の棚田が姿を現しました。機械が入る余地がなく、鍬などを使い人力で棚田の地ならしを行い、田んぼの形に整えて耕耘し畔を作り、水源地からの水路を整備し水を確保し代掻きをし、何とか田植えまでできる状態になりました。地元の耕作者に余った苗を無償で分けていただき、15人の参加者で5月27日に田植えが出来ました。収穫までの時間は、稲の生育を見ながら水回りから草刈り作業に追われましたが、実った稲穂を万感の思いで眺めながら収穫、6俵のお米は格別の味でした。

復田が進み設備も整う

2年目は復田作業も順調に進み25枚まで増え、参加してくれる人も30人に増え、人間力は機械力に劣らないなと感じました。棚田に寄せる思いがどんどん膨らむなかで、休憩施設のオープンデッキを作りました。それに留まらず、手洗い場や簡易トイレも整備してしまいました。資材などは地主さん、建設会社や設備会社が提供してくださり活動の後押しをしてくれました。また耕作など色々な面でのアドバイスも頂いています。大変ありがたいことです。5年後には32枚まで棚田が増え、見ごたえのある棚田の風景が醸し出されました。蛙、イモリや沢蟹等色々な生き物たちも棚田の仲間となりました。復田作業は進み36枚まで増え収穫量も12俵となりました。

5：オープンデッキ／2：ミニ門松づくり交流会／3：農林大学校生と現地交流会／4：荒起こし作業

活動を諦めかけた年

12年目の2019年には高齢化等により参加する人数が10人を切る事態や天候不順で代掻き時に湧水量が激減し36枚すべての耕作ができない状況になり、苦渋の決断で別水路の棚田11枚の耕作をやめました。これで何とか乗り切れるかなと思いましたが、悪い事は続き、ウンカの発生などで収穫量は4俵しかありませんでした。猪による被害を受けた時は復田作業中でしたので、仕方ない、一からやり直せばいいと思いましたが、今回は、来年は無理だな、活動も終わりだなと思いました。

ありがたいことに助け舟がありました。2020年に西四村（にしよむら）ふるさとの会から人的面や資金面での支援をいただきました。さらに棚田を訪れたハイカーや口コミで棚田活動を知った人達が田植え、稲刈り、脱穀、草刈り作業を手伝いたいと連絡が沢山入りました。これで継続できる。ありがたい支援でした。

2022年には、田植えに48人、草刈りに延べ人数で54人、稲刈りは38人、脱穀は7人の参加者がありました。

つなぐ棚田遺産に認定

2021年、浜松市農業担当課から「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に申請したいと話がありました。棚田としての歴史も浅いし規模も小さいのでお断りしたのですが、復田して地域おこしに関する取り組みと、景観保護の活動を評価していると説得され、それならお願いしますと申請を了承しました。認定は無理だろうと思っていましたが、認定されて驚いたとともに、改めて活動の力になりました。さらに静岡県が、企業と農村が協働活動することで農山村地域の活性化を図る「一社一村しずおか運動」の橋渡しをしていただき地元企業と協定を結びました。さらなる支援の輪が広がりました。

棚田を通して多くの人たちとの繋がりが増え、色々なことを教えてもらい助けていただき、共助の在り方も体感できる場所となりました。これからも、里山の景観保護活動だけに留まらず、訪れた人たちが心癒される場所であり続けたいと思います。

（白樫棚田会会長　戸田 達也）

■ 棚田への アクセス

【公共交通】 天竜浜名湖鉄道・金指駅前よりタクシー利用で20分。竜ヶ岩洞入口までは路線バスもある。竜ヶ岩洞広場駐車場から1.8km、徒歩45分

【自 動 車】 新東名高速道・浜松いなさICから県道68号経由で7km

■ お問い合わせ

〒431-2221
浜松市北区引佐町田畑193 竜ヶ岩洞内
Tel. 053-543-0108
e-mail：toda@doukutu.co.jp

棚ガール Tana Girl

Vol.14

棚田の虜になった女子、通称「棚ガール」
そんな女性を紹介するコーナーです!!

三重県伊賀市 からさわ農園 園主 唐澤 寿江

Instagram
@nisiyamatanada
NISHIYAMATANADA

私は千葉県の街育ちですが自然が好きで大学は農学部に進学しました。学ぶうちに後継者不足を知り自ら農業をする決意をします。

学生時代に一人旅の電車の中から見た伊賀の棚田に心を動かされ、このような所で農業をしたい!と思い、伊賀市で農業研修をしました。その時に紹介された農地がまさに電車の中から見て感動した地区でした。私が迷いもせずにその地で農業を始めたのは27歳の時です。初めは多品目の野菜を販売。経営が安定してきたところで念願の米作りを始め、そのタイミングで伊賀市の「西山の棚田」は指定棚田地域になり、その後「つなぐ棚田遺産」に選定され、地区の棚田保全活動が盛んになっていきました。

私の米作りはまだ上手くいきませんが、地域のために出来ることはないか?と、インスタグラムで発信したり、野菜のお客さんに棚田米を販売したり、人を呼び込もうと棚田散策マップの作成にも参加しました。今後は西山の美味しい棚田米をブランド化してたくさんの方々に味わっていただき、維持管理していく大変さや重要さを知っていただいて、皆の力で守り繋いでいきたいと思っています。この美しい風景がいつまでも続いていきますように。

生きもの屋の里山考

文 (株)環境指標生物 志賀 弘春

形を変えて適応する水田雑草、キクモ

梅雨が明け、夏も本番になると、棚田のような田んぼでは稲だけではなく、水田雑草も育ってきます。田んぼは、水が張られている状態もあれば、中干しや落水による乾燥もあるため、植物にとっては特殊な環境です。水田雑草はどのようにして田んぼに適応しているのでしょうか。水田雑草の1つ、キクモを例にご紹介します。

キクモは、田んぼが乾燥しているときは、葉の幅が広い「気中葉」をつけますが、水が張られて水中に沈んだ部分は、葉の幅が狭い「沈水葉」をつけます。気中葉は、葉を乾燥から守る表皮のクチクラ層が発達し、空気中でガス交換をするための気孔が分化しています。一方、沈水葉は、表皮のクチクラ層が発達せず、葉肉細胞も数層しかなく、気孔も分化していません。これにより表皮細胞を通じた水中でのガス交換を容易にし、薄い葉で弱光を効率よく利用しています。このように同じ植物体でありながら、空気中と水中で形や構造の違う葉をうまく使い分けることで適応しているのです。

しかし、キクモなどの水田雑草は乾田化などにより絶滅が危惧されている地域も多数あるのが現状です。伝統的な田んぼの環境に適応した水田雑草は、こうした田んぼがなくなってしまうと生育場所がなくなってしまいます。さまざまな生き物の生活の場でもある棚田のような田んぼがこれからも維持されることを願うばかりです。

気中葉のキクモ

棚田博士は今日も行く！

中島峰広の全国棚田行脚

甲府盆地南縁にある棚田

山梨県富士川町眷米（つきよね）

富士川町は県の南西部、甲府盆地の南縁に位置し、増穂町と鰍沢町が合併してできた新町。眷米は町の北東部、櫛形山麓の扇状地上にある集落。漢和辞典の春米（しょうべい）に通じる難読地名だ。その地名が2022年に選定された「つなぐ棚田遺産」では2か所選ばれている。一つがここで紹介する富士川町の「つき米」、もう一つが鳥取県若桜町の「つく米」だ。後者は1999年に選定された「棚田百選」にも選ばれており、古い火山「氷ノ山」の西斜面中腹にあるスキー場としても知られる集落だ。

富士川町の二つの棚田遺産

2023年3月上旬、山梨県の眷米を訪ねた。富士川町ではこの度の「つなぐ棚田遺産」に、櫛形山麓にある「眷米」と櫛形中腹にある「平林」の2か所が選ばれている。「平林」は棚田オーナー制の実施により早くから知られていたため、2007年1月に訪ね、その探訪記を2012年刊行の著作「棚田その守り人」で紹介しているので、眷米についても訪ねる前からある程度土地勘はあった。

新宿から特急「あずさ」に乗車、甲府で特急「ふじかわ」に乗り換え、市川大門で下車する。14年前に訪ねた時には駅前から増穂町中心街に向かう山梨交通のバスが待っていたが、現在は富士川町のコミュニティバスに代わり、朝夕を中心とした1日4便の運行、町外からの旅行者にはほとんど利用できないようになっていた。公共の交通機関を利用することをポリシーとしているが、仕方なく駅前で客を待っていたタクシーに乗ることにした。

車は駅前から県道4号を南下、釜無川と笛吹川の合流点に架かる長い新富士川大橋を渡る。橋の上からはほぼ正面、目線より上にもう一つの棚田遺産である「平林」の集落がみえる。橋を渡った後も県道413号を直進、富士川町庁舎を左にして櫛形山目指し西に向かう。やがて小川を渡り、西へ左折する辺りがすでに眷米集落の地内である。

利根川の扇状地に拓かれた土坡と石積みの田

棚田は、利根川がつくる左右両岸の扇状地上にみられる。扇状地は砂

中島 峰広（棚田博士）

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO法人棚田ネットワーク名誉代表。全国棚田（千枚田）連絡協議会理事、棚田サミット開催地選定委員会委員長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地歴科卒。2004年まで早稲田大学教育学部教授。著書に『日本の棚田―保全への取組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』『棚田 その守り人』（以上、古今書院）。現在、百選外の棚田についての執筆準備のため全国行脚中。

礫が厚く堆積した地形のため漏水が激しく、ふつう盆地東部の勝沼のように果樹園か畑地として利用されるが、眉米の場合河川水が浸透する前の扇頂部分が水田として拓かれている。しかし、耕土が浅く厚さが15㌢前後しかなく、トラクターの刃がひっかかることがあるという。農水省の一覧表によれば水田面積27㌶のうち傾斜20分の1、すなわち棚田が2・2㌶、枚数79枚、荒廃地0とある。

利根川右岸の川久保地区では、ほぼ南北に5列つながって棚田が拓かれている。それぞれの上段4段ほどは段高2～3㍍ほどの土坡の棚田で広さが1㌃ほど、中・下段の8段は石積みで段高1㍍ほど、広さが2～3㌃はある。一方利根川左岸の宗林地区では農道をはさみ南北に2列、上下段にわかれて分布、上段はそれぞれ10段ずつ、広さが4～6㌃、段高0・3～2・0㍍。下段はそれぞれ7～8段、広さ6～10㌃、段高1㍍前後の石積みの棚田である。その他にも集落内に数枚ずつ石積みの棚田の分布がみられる。

水利は利根川が利用され、配水委員会の管理の下、まず大口堰で左右両岸へ均等に50％ずつ分水される。左岸はさらに3分の2が上堰、残り3分の1が前田堰へ分けられ、旱魃になると利水が時間によって制約される時間水による利用となる。

活性化組織の役員の皆さん

現地では中山間地域直接支払の補助金を個人に配分せず、全額投入してトラクターが走れる農道8本を建設、その後は「眉米の字を後世に伝える会」として活動する。その地域活性化組織の役員にお会いした。

活動のキーパーソンは、直接支払と会の代表を4期20年間務め、現在は顧問になっている大久保俊彦さん85歳だ。妻84歳と2人の娘さんの4人家族。自身は甲府工業土木科を卒業、2年間甲府市内の建設会社に勤めた後、増穂町役場に入庁、いくつかの役職を務めた後、役場のナンバー2である総務課長を経て最後は教育長で終えた町の名士である。

高校1年の時、父親を亡くしてから農作業も担い、兼業農家として職員生活を続け、朝3時に起きて作業をしたこともあったという。眉米では昭和49年頃まで養蚕が盛んで平場と背後の山に30㌃ずつ60㌃の桑畑を所有、母親・姉のちに嫁の3人で養蚕に従事、最盛時には春蚕で400㌔、夏・秋蚕を加え600～700㌔を出荷したこともあったそうだ。現在は水田43㌃、うち20㌃は小作料なしの借地をトラクター15馬力、歩行型2条田植機、バインダーを駆使して耕作、農協へ天日干しの米15俵を出荷しているというから立派なものだ。

1：下方は石積み、上の方は土坡の棚田／2：桑畑。昔は養蚕が盛んだった／3：公民館内部の掲示いろいろ／4：用水路の注意書き／5：梅が満開

現在の代表および会長は中沢修さん75歳、妻72歳のほか長男一家が同居している。6人兄弟の5男、中学を卒業後に東京・滝野川の大工の家に見習として入り、12年間修業した後帰郷、町営住宅に住み大工として自立した。40歳の時、農家だった叔母の家を継ぎ、兼業農家となった。水田35アール、畑20アールを所有、トラクター15馬力、中古の乗用4条田植機、バインダーを用いて耕作、天日干しの米を作っているという。

会の会計を務める今村正泰さん73歳は隣の集落小林に住む非農家。妻72歳が中沢さんの妹になるため会長とは義理の兄弟という関係だ。高校を卒業後、中央市にある雑穀業界ではナンバーワン企業といわれる「はくばく」に入社、63歳の定年まで45年間勤務した。現在は畑10アールを借り、管理機を使用してスーパーで購入する必要がないほどの野菜類を栽培している。会ではパソコンに堪能なため、文書作成に力を発揮、重宝がられている。

左から大久保さん、山形さん、中沢さん、今村さん

理事の山形広喜さんは75歳、妻65歳のほか長女と長男が同居している。中沢さんとは小学・中学校を通じての同級生。高校卒業後、東京・蔵前の装身具店に就職。セールスマンとして10年間働いた28歳の時、父親が亡くなったので実家に戻った。同時に勤務先を甲府市内の装身具店に移し、兼業農家になった。水田22アール、畑25アールを所有、トラクター17馬力と22馬力の2台、乗用4条田植機、3条刈コンバインを駆使しての作業、平場の農家に劣らない装備である。

眷米の字を後世に伝える会

これらの役員が属する地域活性化組織「眷米の字を後世に伝える会」は会員22名、うち非農家5名で構成される。現在の主たる活動は放棄された水田60アールで酒米2・5～3・0トンをつくり、町内の酒造会社に依頼して720㎖瓶、約1000本の清酒を製造、「眷米」のラベルを貼り、町内2か所で販売しているという。そのほか自走式の草刈り機を購入、2㌶の水田の草刈りと年3～4回全員総出で集落内の草刈りを行っているそうだ。

農家も非農家も一緒に

最後に眷米での活動をまとめると、キーパーソンとしての大久保さんの存在の大きさを感ずる。しかし、本人は教育長まで務めた輝かしいキャリアの持ち主でありながらそれをひけらかすこともなく、普通の人としてふるまい、あわせて非農家も活動に加える包容力を持っている。会長を退いてからは現会長を盛り立て、一会員になりきって会を支えている。その雰囲気を最もよく体現しているのが、眷米の人でもなく農家でもない今村さんが生きいきとして発言し行動していることに示されている。このような人たちにより支えられているかぎり「眷米」の棚田が輝きを失うことはないのではないだろか。

眷米棚田へのアクセス

【公共交通】身延線市川大門駅前からタクシー利用で約10分

【自動車】中部横断自動車道・増穂ICより県道413号を西方向へ進み突き当たりの山裾が目的地。ICから3.5km

読者のひろば

複数の自治体にまたがる棚田ツアーを企画して気づいた事

佐賀県唐津市　岩本英樹

この文章を書いているのは棚田ツアー開催前ですが、取り組みや気づいたことを報告します。開催日は6月24日、7月1日の日帰りバスツアー。名称は「光を観る　棚田ツアーin佐賀～稲作の工夫を知る～」。参加費は5,000円。棚田景観と稲作の歴史と棚田造成の工夫を見て知るツアーです。

私は7年前に唐津市役所を退職し、市町村合併前の相知町役場時代から蕨野の棚田の振興に関わってきた知識を活かし棚田振興を行いたいという強い思いから、私が企画した棚田ツアーを旅行業者に相談して取り組むことになりました。

「稲作の工夫を知る」というテーマを付けることで、畦板の設置がある縄文晩期の菜畑遺跡や、時代の分かる溜池や井堰、暗渠がある棚田の4箇所をつなげた企画にしました。苦労したことは、①4個所の魅力作りのために、遠方の現地や図書館、自治体、先生宅に複数回行ったこと、②遠方の棚田集落の了解とりに複数回行ったこと、③SNSの発信に取り組んだこと、④バスの中で私がガイド用の写真スライドショーを作成したこと、そして一番苦労したのが、⑤参加者集め、の5点でした。参加者集めに関しては、先ずチラシを作成して配布、次に無料のラジオに出演、報道機関への説明、SNSでの発信、地元新聞への投稿、佐賀県への働きかけなど様々な努力をし、新聞に取り上げられて参加者が集まるようになりました。

水をたたえた蕨野の棚田

Facebook→
『蕨野棚田ガイド』

棚田ツアーに取り組んで気づいた事は、①今回のような複数の市を対象にした棚田ツアーは、自治体職員は他の地区のことには関われないので自治体ではやれない、②DMが全く無かったので、新聞に掲載していただくのが一番の効果、また、複数にまたがるので佐賀県の協力が必要、③準備期間を確保して先ずは動いてみることが大事、ということでした。今回の棚田ツアーを成功させて、来年以降も継続できたらと思っています。

会員さんのBest Shot!

大中尾の棚田との出会い

長崎県長与町　畑山 実

仕事の関係で埼玉から長崎へ来て、驚いたのが夜空の星の数でした。はじめは無邪気に天の川を撮って楽しんでいましたが、やがて機材も増えていき、季節感のある天の川を撮りたいと思うようになりました。大中尾の棚田は、棚田ネットワークのHPにも紹介されており、自宅からも近いことから田植え前の水を張った棚田を狙おうと、足を運びました。ところが、水を入れる前だったり、曇っていたりと空振り続き。そしてようやく撮れた一枚が掲載の写真です。その後も青々と茂る棚田や畦のヒガンバナを狙って幾度となく訪れては撮影を楽しみました。

読者の声募集！

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください！ご要望、感想やご質問でもOK！（声800字まで、レポート400字まで。写真も添えて）

〒一六〇－〇〇二三　東京都新宿区西新宿七－一八－一六
トーシンハイム七〇四号「棚田に吹く風　読者のひろば」宛
メールでも受付けています ⇩ hensyuu@tanada.or.jp

棚田ネットワーク　ミニ講演会を聞いて

東京都大田区　西田 幸司

棚田地域振興に向けた取り組み（農林水産省・地域振興課　篠崎課長補佐）

同氏は4月からの担当とは思えないほど棚田について勉強されていて、オフィシャルサポーター制度、棚田カード等について熱く語っていただいた。

私自身も2000年代前半から大阪・能勢町の長谷のオーナー制度に関西在住時代参加していて（現在は廃止）、その後東京に戻ってから10年以上大山千枚田のオーナー制度に参加しています。美しい原風景を後世に残して欲しいと願望している一人です。

中島名誉代表の尽力等もあり農林水産省が重い腰をあげてくれた「棚田地域振興法」施行後令和4年3月に認定された271の「つなぐ棚田遺産」地域は積極的に棚田保存・棚田を核とした地域の振興に取り組んでいることは嬉しい限りですが、守り人が高齢化していたり多世代が参加してくれなかったりして現実は厳しいものと推測されます。今後も同氏には、つなぐ棚田遺産地域の現地を多く見られて、行政のリーダーとして頑張っていただきたいと思いました。最後に我々棚田好きな人間がオフィシャルサポーターを紹介したりすることで協力していきましょう！

最近訪ねた棚田（NPO法人棚田ネットワーク・中島名誉代表）

90歳になられようとしている棚田博士の訪問地は、新たに選定された「つなぐ棚田遺産」の3地域であった。棚田の情報とともにそこで棚田を守り続ける人達の話もあり、失礼ではありますが相変わらず視点は定まった報告であった。

①山梨県富士川町「眷米棚田」……酒米つくり・眷米の名前保存
②長野県中川村「飯沼棚田」……酒米つくり他
③山形県遊佐町「白井新田」……耕作面積の大型化が進む地域・ひまわりで有名

私の故郷である十勝平野の畑作農業（元々は水田の東限地域であった）も、経営多角化・後継者不足等により一農家の耕作面積が50ha以上が多くなり大型化しているのが現実です。大型化により機械の台数が増えています。棚田博士の報告を複雑な想いで聞いていました。

編集部イチオシ！ BOOK & MOVIE

BOOK

誰も教えてくれない 田舎暮らしの教科書

清泉 亮 著
1,400円（+税）
東洋経済新報社
2018年7月

この種の本には好事例のみが書かれたものも多い。本書は「移住先の）高額な健康保険料や介護保険料」などの悪事例や、「地域」「物件」「お金」「人間関係」などの切り口でマイナス面も説いている。「内覧はプロに同行してもらえ」「クルマはどこで買えばいいか」「ゲートボールには誘われても行くな」など具体的な情報も。各地の棚田や保全団体を通じて人間関係をつくってから移住を考えている方にとってはスタートラインが違うのだが、「悪い展開」も予め知ることが成功の秘訣、というのは同意出来る。

第47回 棚田俳壇

令和5年

まん しろろと 五七五

山笑う つなぐ棚田の 誕生を
夜明け待ち 枇杷の梢に 訪問者
梅雨前に 雨戸を叩く 線条雨
三年ぶり 田のぬくもりを 足元で

所沢市　上久保節夫

田植え終え 行列作る 泥落とし
里山に 笑いが戻る 五月晴れ
子供らも 大人に負けじと 苗植える
畦道で お弁当広げ 五月風

豊島区　小川曜子

学校田 童謡聞 田植え成る
豊作を 祈りて渦巻く 車田に
遺産なる 田見て先人 苦労知る
村はづれ 古田有りて 遺産なり

新潟市　田入絵人

行々子の 囀り競う 季節かな
薫風に マスク外して 清々し
農泊や 端午の 節句も 月遅れ
田植え終え 待っていました ほう葉寿司

取手市　杉山行男

薫風に 浮かれこぼしぬ 握り飯
カラス増え 藪蚊ワクワク 夏近し
蚊の音に 汝ゆるせと 頬を打ち
「らんまん」に 草の名教わる 朝餉かな
到来の 筍剥きに 弾む午後
Gセブン いちやもんつけの 黄砂かな
国盗りは 今も昔も 人の業
口国では 棺桶造りの 動員令

調布市　高木宏明

茶畑の 色移り行く 同窓会
葉桜の 中に一輪 控えおり
山刻々 色変えて行き 春惜しむ
何もかも グレーを帯びる 春野かな
(写)コロナ明け 春を寿ぐ 富士の峰

浜松市　一露

誌上添削

蟬や猛りて森を揺るがせり

■ヒント
「蟬」を中心に据え、下五句を軽く

【次回募集は8月末日】※解答は下記

解答例：蟬の 鳴くやまの 揺らぎたる

棚田ネットスタッフの つ・ぶ・や・き（輪番制）

今回のつぶやき人　事務局 うっかりネジ

ドキュメンタリーが好きだ

昔から「ドキュメンタリー」といわれる分野のテレビ番組や映画などを好んで観ています。

自然モノはもちろん好きで、里山を舞台にした番組には、棚田が登場することも多い。最近は映像機器や技術の飛躍的な向上によって、本当に精彩で美しい映像を見ることができ、思わず息を呑んで見惚れてしまう。ドローンなどは、まさにイノベーションといえるでしょう！ ドローンは、今まで見ることができなかった側面からの棚田の姿もたくさん映し出してくれています。

自然などの映像美はもちろんですが、ドキュメンタリーの醍醐味は、生の人間が描き出される「人間模様」だと思います。NHKのドキュメンタリーにはやはり秀逸なものが多いですね。

僕が好きなのは『Dearにっぽん』。この番組、以前は『目撃！にっぽん』という番組名で放送していたもの。日本各地の「いま」を見つめ、そこに生きる人々の姿を真摯に伝えてくれます。ここのところはコロナ禍に奮闘する人々を描く内容も多く、心をぎゅっと掴まれたようで、観ていて苦しくなることも多くありました。でもこの番組の良いところは、決して絶望的に終わらず、希望の芽を最後に見せてくれるところ。これで救われる気がします。

もう一つもNHKの『ETV特集』。これは、鋭く社会に切り込んでいく番組。報道番組からは本当の社会の姿が見えない昨今、社会の歪みや、時には不都合な真実までも映像化し、制作者が「大切な何か」を懸命に伝えようとしているのが感じとれます。

人それぞれいろんな事情で、いろんな思いを日々抱きながら、それでも生きている。この複雑で不条理でストレスフルなこの社会も、ドキュメンタリーに触れると、少し愛おしく思える気がするのです。

千葉県鴨川市
川代棚田でお米づくり

久しぶり五月晴れの中「田植え体験」を実施

千葉県鴨川市川代柿ノ木代棚田での体験プログラムは9年目を迎え、田植え体験はオーナー行事に合わせ5月3日〈祝〉に中島名誉代表も参加し、19名でにぎやかに実施しました。農林水産省の「つなぐ棚田遺産」に選定されたこともあり、これまでで最も多い250名ものオーナーさんや地元大学生が参加され、活気にあふれる田植えとなりました。

田植え後の食事は、地元手作りのタケノコご飯のお弁当をいただきました。食事後、中島先生から、田植え体験の参加への感謝と厳しい棚田地域の現状から、皆様のご支援を引き続きお願いしたいとの挨拶をいただきました。

新型コロナのパンデミックや、ウクライナ戦争の影響による世界的な食糧不足などにより、棚田でのお米づくりへの関心が高まっているよう感じました。

今年も大きな災害もなく無事稲刈りを迎えられるよう祈りつつ、帰路につきました。なお、草刈、脱穀や収穫祭等についても希望者があれば参加していきますので、皆様の積極的な参加をお待ちしています。　（杉山行男・小川順子）

岐阜県恵那市
棚田ビオトープ プロジェクト

「かえるの卵を探そう！」「棚田ビオトープ田植え」開催

春の水溜りに卵を産むヤマアカガエルの卵塊を探す「第16回かえるの卵を探そう！」が七十二候の「雀始巣（すずめはじめてすくう）」の頃、2023年3月21日（火／春分の日）に開催されました。今年は春が早かったため3月12日に事前調査をし、7卵塊を見つけました。イベントの日の21日には37卵塊、その後の29日の調査では87卵塊、今年は合計131卵塊見つけることができました。本会代表理事の杉山行男さんを含め、18名（大人7名、子供11名）の参加がありました。自由研究で棚田を調査する小学生とその父親の参加もあり、棚田について熱心に尋ねておりました。

今年の棚田ビオトープの田植え日である5月26日（金）は、七十二候の「紅花栄（べにばなさかう）」頃ですが、次は麦秋至（ばくしゅういたる）になります。そう言えばかつて坂折棚田では裏作で麦を育てていたことを聞いたことがあります。10:30から岐阜県立国際園芸アカデミーの学生21名により田植え開始。小さな田んぼなのですぐに田植え終了しました。　（相田　明）

静岡県松崎町
石部棚田で昔ながらの米づくり

田んぼ準備～田植え

4月15日、時折り激しく降る雨の中、雨合羽で完全武装したボランティア7名で代かき作業を行いました。いつも土がカッチカチで、水を回すのが大変な作業ですが、雨のおかげで既に土はやわらかく、しかも取水口からは大量の水がほとばしり、いつもの三倍の速さで作業完了。地元のお母さんが、昔から「代かきは雨の日にやれ！」という格言があると教えてくれました。

GWの初日4月29日には、畦付け・畦塗り作業をボランティア8名で行い、5月20・21日に無事田植えをむかえました。1日目は雨の朝でしたが、田植えが始まる頃には晴天に！ 2日目もまずまずの天気で、ファミリーも2組参加し、総勢15名ほど。賑やかな田植えとなりました。子どもたちも大きくなり、上手に植えられるようになりました。次は7月8・9日の草刈り・草取りです。　（高桑 智雄・久野大輔）

棚田を囲む暮らしを共に ～ここにしかない縁（えん）がある 来たれ耕す人～

第28回 全国棚田（千枚田）サミット in 那智勝浦町

2023年 11月18（土）19（日）

那智勝浦町体育文化会館

和歌山県PRキャラクター「きいちゃん」

7月1日 OPEN予定！

棚田サミット ホームページ▶

問合せ 第28回全国棚田（千枚田）サミット那智勝浦町実行委員会

〒649-5392 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大字築地7丁目1－1（那智勝浦町役場内）

TEL. 0735-29-4455　FAX. 0735-29-7146　E-mail：norin@town.nachikatsuura.lg.jp

棚田の応援団 わたしたちと〝棚田の応援団〟やりませんか！

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい！」という会員によって自主的に運営されているNPOです。消えゆく美しい“棚田”をどのように保全していくことができるのでしょう？ 一緒に考えませんか？ ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう！

会員になろう！

私たちは、会報誌「棚田に吹く風（年4回）やホームページで豊富な棚田情報を発信しています。会員になりこれらの活動に参加してみませんか？

年会費

○個人会員

維持会員	1口1万円（1口以上）
一般会員	4,000円
応援会員	3,000円
学生会員	2,000円

法人会員を募集しています！

私たちは、棚田を守るため、農山村の人々と都市住民双方の協力のもとに様々なプログラムを企画・運営しています。これらの社会貢献活動に賛同し、ご支援いただける企業・団体・事業主様を募集しています。詳細はお問い合わせ下さい。

年会費

○法人会員（賛助会員）
1口３万円（1口以上）

編集部から

ネットを見ていると各地の棚田での田植えのニュースや写真が掲載されることが多くなったように思う。また、最近は農を志向する芸能人の活動記事も多く、そこに棚田がよく出てくる。

印象的だったのが、俳優の山田孝之さんと松山ケンイチさんが、京都・宮津市の棚田で田植えをしながら農対談する記事や、柴咲コウさんが静岡県浜松市の「久留女木の棚田」で田植え体験をした記事など。

華やかな芸能人が田植えをするとなると、やはり絵になるロケーションがいいとなるのだろうが、最近は感度の高い芸能人たちが、自らの意思で棚田を選んでいるような気がする。これも時代の変化だろうか。

ホームページのことを見て！

棚田ネットのWebサイトも見てみてください！

https://www.tanada.or.jp

棚田に吹く風

2023年 夏号 Vol.128

発行 認定NPO法人 棚田ネットワーク

〒160-0023
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号
Tel / Fax 03-5386-4001
e-mail：info@tanada.or.jp　URL：www.tanada.or.jp
郵便振替口座：00100-7-151565

［今回の表紙］三重県熊野市・丸山千枚田（写真提供：熊野市）